

その多様な論を貫いているのは、キリスト教的人文主義が異教的文化を受容していったとき、その根底には「再臨のキリストによる予型論」とも呼ぶべきものが見て取られるという視点であった。もとより個々の論点は、とりわけ哲学・神学の根本に関わる主題の場合は、ある意味で、いわば己れ自身の無化ないし身心脱落のごとき場を介してさらに吟味・探究さるべきものであろう。というのも、何よりも教父たち自身が、学と修道の極みにおいてそうした道行きを遂行し、後世のわれわれに範を示してくれているからである。

それはともあれ、著者が本書において扱った問題とその研究姿勢は、神学と哲学、教父学と西洋古典学等々が分離したまま放置されている今日の（西欧近代以降の）大方の学問状況に対して、小さからぬ警鐘を鳴らすものであろうし、またそのように受けとめられなければなるまい。この点、著者の言葉を借りて言えば、教父や中世の人々が再臨のキリストを視座にしつつ語り継いだ文化伝承とそこに漲る根源的な方法は、「今日を生きるわれわれの視点をも変容させ、あらゆる文化圏の文化遺産を光の器として変貌させるだけの力を秘めている」と考えられよう。

若林啓史 著『聖像画論争とイスラーム』

知泉書館，2003年，xii+335頁

大森正樹

聖像画破壊運動，所謂イコノクラスムがいかなる原因によって生じたか，それについてはいまだに明らかではない。ユダヤ教やイスラームによる画像の禁令に影響されたという考えも依然根強い。最近でも，Patrick Andrist; *Le Objections des Hébreux: un document du premier iconoclasme?* (*Revue des Études byzantines*, tome 57 (1999), 99-140.) といった論文などが出てくるところを見ると，この問題には決着がつかないことがわかる。それではいったいユダヤ教やイスラームでは，この問題をどう考え，キリスト教に対しどのような態度をとっていたのか。これについて詳しく述べることの出来る者は稀な部類に属する。本書はこの問題について，イスラーム

側の見解も交えながら、アラブ系のキリスト教徒が聖像をいかように考えていたかを示す、現今の世界情勢も鑑みると時宜を得たものと言えるだろう。

本書の構成は、まず序章において、課題と歴史的背景を述べ、第一章は、主人公とも言うべき、アラブ人のキリスト教徒で聖像画を擁護したテオドロス・アブー・クッラ (ca.755-830) の略伝や著作そして彼に対する研究書の紹介に当てられている。続く第二章では、聖像画破壊運動の正教会内部における事件の顛末や聖像画に対する教義の問題を扱う。第三章は、これまたアラブ人で聖像画を積極的に擁護したダマスクスのヨハネ (いわゆるダマスケヌス) の略伝やその神学を、第四章では、聖像に関するイスラームの教義を、第五章では、イスラーム教徒の聖像への対応の種々相を、第六章では、アブー・クッラの聖像崇敬論を、第七章では、クッラが提起する聖像崇敬論の問題がいかなる形でその後展開していったかを述べている。そして最後に、付録として、アンティオキアのシメオン修道院のミハイル著、『ダマスクスの聖ヨハネ伝』と本書の聖像擁護論の根拠となったクッラその人の『聖像画崇敬論』のアラビア語からの翻訳を掲げている。

アブー・クッラの聖像擁護論はおおむね先達のダマスクスのヨハネのそれを受け継いでいるのだが、ダマスクスのヨハネはともかく、アブー・クッラはそれほど知られているようには思えない。彼はダマスクスのヨハネの一世代後に属し、アッバース朝初期にエデッサに生まれたとされ、「キリスト教教義をアラビア語で表現した」人物で、ヨハネと同じパレスティナの修道院で学んだ。そのため東方では稀な体系家であるヨハネの神学をじかに利用できた。ヨハネはその著作をギリシア語で残しているが、アブー・クッラはどうであろうか。彼はエデッサ出身であるから、その母語はシリア語であろうとされる。しかし彼の著作として伝わっている写本はギリシア語、アラビア語、グルジア語であるが、シリア語のはない。またグルジア語のは翻訳であって、そうなると彼はギリシア語とアラビア語で著述したのかということになるが、ギリシア語 (メニューに収められている) に関しては説が分かれており、著者は、ギリシア語写本は同僚の修道士が翻訳したものであろうと推測している (p.30)。従って彼はアラビア語でキリスト教教義を書き始めた初期の学者の層に属する。クッラは後、各宗派と教義論争を行い、思弁神学者として名を馳せた。

ところで本書の第二章によれば、聖像画破壊運動は、通常二期 (726 頃-84 年と 814-43 年) に分けられる。破壊論争の口火を率先して切ったのが、東ローマ皇帝で

あり、それを擁護の側から収束するのに功があったのは皇妃であった。第一次聖像画破壊運動は小アジア出身のイサウリア朝のレオン三世により始められた。彼への影響として、ウマイヤ朝のヤジード二世の聖像画破壊の勅令があるとされる。ヤジード二世は「テッサラコンタペクス」なるユダヤ教徒に教唆され、聖像破壊に踏み切り、それをレオン三世が倣ったと言われることがある。事実、ウマイヤ朝と東ローマ帝国とで聖像画破壊運動は前後して行われているので、いっそうこの理由がもちだされる。しかし著者は、「テッサラコンタペクス」は実在の人物ではなく、両帝国の聖像画破壊運動の因果関係は実証されていないと言う (p.47)。後、コンスタンティノス六世の摂政となった皇妃イレネは政策を変更し、擁護派を総主教につけた (784 年)。ダマスカスのヨハネは少し前に『聖像画破壊論者に対する反駁』の書を著しており、クッラが生まれ育ったのは聖像画破壊運動の渦中であつた。

第二次のそれは「アルメニア」人レオン五世により始められ、破壊に反対したストゥディオス修道院長テオドロスは流刑になっている。後、皇帝テオフィロスが迫害を再燃させたが、その遺児の摂政となった皇妃テオドラが 843 年に聖像画破壊運動を終止させた。この期間クッラは諸国を遍歴し、ハッラーンの主教にもなり、820 年頃『聖像画崇敬論』を著している。

さて著者によれば、聖像画擁護論は第一次破壊運動と対応して二つ、第二次に対して一つ現れてきており、それぞれ「古典的聖像画擁護論」、「キリスト論的聖像画擁護論」および「スコラ哲学的聖像画擁護論」というふうになんまされる。この「古典的」の方の代表格がダマスカスのヨハネである。彼は絶対的崇拝と相対的崇敬を区別し、前者は神にのみ、後者は尊敬に値する人や物、場所に向けられ、旧約においても、これは禁止されていないとする。また像は原型に必ずしもすべての点において等しくはないとし、画像は原型に類似性をもっているため、画像に向けられた崇敬はその材質ではなく、画像を通して原型に向けられ、キリストは見えない神が受肉したものであるから、表現は可能だとした。第二の論を代表するのが、ストゥディオスの院長テオドロスとコンスタンティノープル総主教ニケフォロスである。これはキリストは神であり、人であるというキリスト論的解決法で、キリストの画像は人性という性質を描いているのではなく、神性と人性を備えたキリストの位格を描くものである。この位格においてキリストは特定の人間の姿をとっていて、それは描くことができるとした。また像は関係的なものであって、本質においては原型に等しくないが、類似性によつ

て原型に導くものであるとした。第三の「スコラ的」なものは、この当時アリストテレス哲学が援用され、議論されるようになったことに基づいている。つまり原型と画像の関係を原因と結果の概念で説明しようとするものである。ただこうした三つの理論がキリスト教世界に等しく受け入れられたのではなく、「古典的」のものが多く受け入れられたと著者は言う (p.61)。

イスラームには、(1) 教義は時間を超えて不変であり、一貫している、従って、画像の否定はイスラーム発生当時から固有であるという立場、(2) 教義は基本的部分を保持しつつ、時とともに発展・変遷するから、画像禁止の規範の成立の時系列的議論を要するという立場がある (p.110~)。著者はそうした状況をさまざまな資料を使って考察し、結局、7世紀末ころまでは「偶像」以外の画像については評価は定まらず、次第に「世俗的画像」は抑圧され、「宗教的画像」は禁止がかなり徹底していたことを明らかにする。その上で、キリスト教徒の「聖画像」に関しては、キリスト教の教義で画像の使用が認められている以上、一時的な画像禁止の例はあっても基本的にキリスト教への理解を示してきたとしている (p.131)。

さてクッラはその著書において、破壊論者たちへの反駁とキリスト教側の論拠による証明、そしてより抽象的な論理に基づいた証明を試みる。彼は崇敬と像という概念について、旧約では預言者たちが神以外の人物や物を崇敬した例、像を制作した例を挙げて、神がこれらのものを全面的に禁止したのではないことを示す。ヨハネを受け継いで、神への崇拜と神以外のものの崇敬は異なるという論拠に立つ。アラビア語においても崇拜と崇敬を意識的に使い分けている。しかしクッラはヨハネと違い、イスラーム世界での評価を念頭に置いている。またクッラの論の中には、アリストテレスの体系は見られない。それは首都の神学がイスラーム国内のキリスト教徒に直ちに伝達されるような状況ではなくなっていたからである。ただイスラーム世界ではクッラの擁護論を肯定的に反映させた学者は現れなかった。アッラーの創造を模倣する行為を画像の製作の中にイスラームは見たのであるから、それは当然であるかもしれない。

著者はクッラの時代、東方キリスト教世界とイスラーム世界において翻訳による神学や哲学の継受の流れが頂点にあり、双方に影響が著しかったこと、しかしアラビア語という土壌の上に蒔かれたキリスト教思想は独自の発展を見せ、クッラのキリスト教的著作もまたイスラーム神学の構築に寄与したことも事実であると述べる。

美術史的な観点にとどまらない理論的な聖像画論や聖像画破壊運動についての踏み込んだ日本語による著作はまだない。そのような状況の中に、若林氏がイスラームに近い観点から、アラブ系の東方キリスト教神学者がこの問題をいかように扱ったかという興味ある書物を著されたことは、この分野の研究を開拓するものである。本書は本論の約3分の1弱が翻訳で、本論は、上述のような現状の性質上、背景となる歴史や知的風土の叙述に多少傾いているが、今後、可能なら、理論面を主とした著作を望みたいところである。

蘭 田 坦 著『クザーヌスと近世哲学』

創文社，2003年，258＋7頁

八 卷 和 彦

本書は、永くクザーヌス哲学の研究に携わり、現在、日本クザーヌス学会会長を務める著者の手になる、斯界待望の新たなクザーヌス研究書である。先ず本書の構成を紹介する。

- 第一章 近世的思考の原点——クザーヌスの「ドクタ・イグノランチア」をめぐる——
- 第二章 クザーヌスと「無限」の問題
- 第三章 近世哲学における神の問題——クザーヌスからカントへ——
- 第四章 クザーヌスにおける *Idiota* の立場と〈ことば〉
- 第五章 ルネサンス的人間観の成立と意義
- 第六章 宗教における多元性と普遍性——N・クザーヌスの『信仰の平安』をめぐる——
- 第七章 〈*aenigmatica scientia*〉について——後期クザーヌスにおける知の問題——
- 第八章 〈*non—aliud*〉について——後期クザーヌスにおける神の問題——
- 第九章 近世初頭における自然哲学と自然科学